聖　書

原文校訂による口語訳

知恵の書

フランシスコ会
聖書研究所訳注

中央出版社

はしがき

知恵の書は、その記述の時代、言語、教義の点から、旧約聖書のうちで新約聖書と最も密接な関係にあるものと思われます。すなわち、本書はキリスト降誕の約半世紀前にしるされたもので、おそらく最後の旧約聖書ということができましょう。また、新約聖書と同様、ギリシア語でしるされたことはほとんど確実と思われます。とくに教義の点からすれば、本書は全旧約聖書に含まれている教えを一まとめにした結びであり、新約聖書のための最終的な準備となっています。事実、本書中に見られる特有の教えや語法は、新約の偉大な奥義が形成されるための摂理的準備となっています。

本書は、記述の時代が新しいこと、ヘブライ語以外の言語でしるされていること、およびその教えが新約聖書のそれに接近していることなどの理由から、他の六書とともにユダヤ正典目録から除外されています。これらは第二正典と呼ばれていますが、しかし他の聖書と同様、神感書として常にキリストの真の教会から重用されています。中でもとりわけ「知恵の書」は、使徒時代から教父たちによってよく引用されており、また教会典礼の中にもしばしば使用されています。

本書は当研究所が発行する第二正典の最初のものでありますから、解説中に本書の正典性に関する問題のほかに、旧約聖書の正典成立の全般的な歴史についても簡単な説明を付け加えました。

「知恵の書」の含蓄豊かな文章をできるだけ忠実にかつ明りょうに訳すために、所員一同は努力を惜

しまず最善を尽くしたつもりでありますが、ふじゅうぶんな点がないとはいえません。ご寛容をこうと同時に不備な点のご指摘をお願いします。いま世に送るこの詩的な教訓書の一つである「知恵の書」によって、読者各位が聖なる「知恵」を学び、その導きに従って不滅の生命にはいることができますれば、これにまさる喜びはありません。

一九六〇年　ラテン門外の使徒聖ヨハネの祝日

東京

フランシスコ会聖書研究所

目次

旧新両約聖書の書名および略名……IV
凡例……VI
知恵の書の解説……1
知恵の書（本文と注）……25
原文批判……134

旧・新両約聖書の書名および略名

旧約聖書

歴史書

創世記……創
出エジプト記…出
レビ記……レビ
民数記……民
申命記……申
ヨシュア記…ヨシュア
士師記……士
ルツ記……ルツ
サムエル記上…サムエル上
サムエル記下…サムエル下
列王記上……列上
列王記下……列下
歴代史上……歴上
歴代史下……歴下
エズラ記……エズラ
ネヘミヤ記…ネヘミヤ
トビト記……トビト
ユディト記……ユディト
エステル記……エステル
マカバイ記上…マカバイ上
マカバイ記下…マカバイ下

教訓書

ヨブ記……ヨブ
詩編……詩
格言の書……格
コヘレト(伝道の書)…コヘレト
雅歌……雅
知恵の書……知
シラ書(集会の書)…シラ

預言書

イザヤ書……イザヤ
エレミヤ書……エレミヤ
哀歌……哀
バルク書……バルク
エレミヤの手紙…エレミヤ・手
エゼキエル書……エゼキエル
ダニエル書……ダニエル
ホセア書……ホセア
ヨエル書……ヨエル
アモス書……アモス
オバデヤ書……オバデヤ
ヨナ書……ヨナ
ミカ書……ミカ
ナホム書……ナホム
ハバクク書……ハバクク
ゼファニヤ書……ゼファニヤ
ハガイ書……ハガイ
ゼカリヤ書……ゼカリヤ
マラキ書……マラキ

新約聖書

歴史書

マタイによる福音書……マタイ
マルコによる福音書……マルコ
ルカによる福音書……ルカ
ヨハネによる福音書……ヨハネ
使徒行録……使

書簡

ローマ人への手紙……ローマ
コリント人への第一の手紙……一コリント
コリント人への第二の手紙……二コリント
ガラテヤ人への手紙……ガラテヤ
エフェソ人への手紙……エフェソ
フィリピ人への手紙……フィリピ
コロサイ人への手紙……コロサイ
テサロニケ人への第一の手紙…一テサロニケ
テサロニケ人への第二の手紙…二テサロニケ
テモテへの第一の手紙……一テモテ
テモテへの第二の手紙……二テモテ
テトスへの手紙……テトス
フィレモンへの手紙……フィレモン
ヘブライ人への手紙……ヘブライ
ヤコブの手紙……ヤコブ
ペトロの第一の手紙……一ペトロ
ペトロの第二の手紙……二ペトロ
ヨハネの第一の手紙……一ヨハネ
ヨハネの第二の手紙……二ヨハネ
ヨハネの第三の手紙……三ヨハネ
ユダの手紙……ユダ

預言書

ヨハネの黙示録……黙

凡　例

上欄の数字は原文の節。
下欄のイタリック数字はブルガタ訳聖書の節。
〔〕印の中の数字はブルガタ訳聖書の章節。
＊印は付録にある原文批判の注。

知恵の書の解説

本書の名称はギリシア語写本では、「ソロモンの知恵」と題されており、ブルガタ訳に編入された本書の旧ラテン語訳では、「知恵の書」となっている。本書は、「知恵」について述べた旧約聖書の教訓書のうちでいちばんすぐれているので、「知恵の書」という名称に価する。また新約聖書の教訓ともよく調和しているので、聖アウグスチヌスによって、「キリスト教的知恵の書」と呼ばれている。

名　称

本書の区分のしかたにはいろいろあるが、そのうちで、次のような分け方が最も普通である。

区分と内容

第一編（1—5章）……知恵は義人、信仰者に永遠の生命をもたらす。悪人、不信の徒は永遠の死をうける。

第二編（6—9章）……ソロモン自身が知恵の起源、性質、働きを述べ、その卓越性を説く。

第三編（10—19章）……人祖の創造から選民のエジプト脱出時までの歴史の中にあらわれた知恵の働きが述べられる。

第三編はさらに三部にはっきり区分される。第一部（10—12章）と第三部（16—19章）は、主題を組織的に扱っており、第二部（13—15章）はそれらの主題からはずれて、知恵とは正反対の偶像崇拝の起源、性質、影響を述べている。それで第二部は事実上、第二編と対照をなしている。

第一部の中には、エジプト人とイスラエル人に関する七つの比較の第一のもの（11^{5-14}）が見られる。これは、エジプト人がうけた罰とイスラエル人がうけた恵みとを、対照的に扱ったものである。あとの六つは第三部の中にあげられている。

本書の各編はさらに細かく区分することができる。各区分ごとに、本文の中に表題を付しておいた。それらがさらに区分されうる場合は、小見出しをかかげず、表題に付した注の中でこれを説明した。本書の各部の表題は次のとおりである。

第一編　知恵と人の行く末（1—5章）

神を求め義を行なえ（1^{1-15}）
悪人の人生観（$1^{16}-2^{24}$）
義人の報いと悪人の罰（3^{1-12}）
子のない義人と子持ちの悪人（$3^{13}-4^{6}$）
短命の義人と長寿の悪人（4^{7-19}）
最後の審判における義人と悪人（$4^{20}-5^{23}$）

第二編　知恵の性質と価値（6—9章）

王たちに必要な知恵（6^{1-11}）
知恵は求める者にみずからあらわれる（6^{12-21}）
知恵を語るソロモンの登場（6^{22-25}）
ソロモンの知恵は生まれつきのものではない（7^{1-6}）
どのようにソロモンは知恵を得たか（7^{7-14}）
知恵について語るまえの祈り（7^{15-21}）

知恵の属性（$7^{22}-8^{1}$）
知恵の持参金はすべてにまさる（8^{2-8}）
支配者に対する知恵の価値（8^{9-16}）
知恵を求めるソロモンの決心（8^{17-21}）
知恵を求めるソロモンの祈り（9^{1-18}）

第三編　歴史にあらわれた知恵の働き（10—19章）

第一部　宇宙創造からエジプト脱出まで（10—12章）

アダムとノア（10^{1-4}）
アブラハムとロト（10^{5-9}）
ヤコブ（10^{10-12}）
ヨセフ（10^{13-14}）
モーセと選民（$10^{15}-11^{4}$）

I　水はエジプト人を害し、イスラエル人を救う（11^{5-14}）

神の寛容（11^{15-20}）
寛容の理由（$11^{21}-12^{2}$）
カナン人に対する神の寛容（12^{3-11}）
寛容の理由（12^{11-18}）
この寛容が教えるもの（12^{19-22}）
悔い改めないエジプト人への厳罰（12^{23-27}）

第二部　被造物礼拝（13—15章）

天体と自然の礼拝（13^{1-9}）
偶像崇拝（$13^{10}-14^{11}$）
偶像崇拝の起源（14^{12-21}）

偶像崇拝の結果（14^{22-31}）
イスラエル人は偶像を崇拝しない（15^{1-6}）
偶像製作者の愚かさ（15^{7-13}）
エジプト人の愚かな偶像崇拝（15^{14-19}）

第三部　エジプト脱出時の神の摂理（16―19章）

Ⅰ　かえるはエジプト人を苦しめ、うずらはイスラエル人のかてとなる（16^{1-4}）
Ⅱ　青銅のへびはイスラエル人をいやし、虫はエジプト人を苦しめる（16^{5-14}）
Ⅲ　自然はエジプト人を苦しめ、イスラエル人を助ける（16^{15-29}）
Ⅳ　エジプトのやみとイスラエルの光（$17^{1-18^{4}}$）
Ⅴ　死の天使はエジプト人をゆるす（18^{5-25}）
Ⅵ　紅海はイスラエル人を通し、エジプト人をのむ（19^{1-9}）
Ⅶ　被造物はイスラエル人に仕える（19^{10-12}）
　(イ)　エジプト人はソドム人と同じように罰される（19^{13-17}）
　(ロ)　改められた宇宙の調和（19^{18-22}）

結び（19^{10-22}）

原語と資料

日一般の意見は、本書の原語をギリシア語で書かれている。今（聖ヒポリトス、アレキサンドリアのクレメンス、テルトリアヌス、聖キプリアヌス、聖アンブロジウスなど）は、原語はヘブライ語にちがいないと結論している。これはおそらく、「ソロモンの知恵」という本書の名称から割り出したものであろう。ヘブライ語とギリシア語の両方に精通していた聖ヒエロニムスは、これに反して、本書の原語はギリシア語だと確信していた。かれは、

今日知られている最も古い知恵の書の写本は、ギリシア語で書かれている。今

「本書の文体にはギリシア語の優雅さがにじみ出ている」と述べている。

ところが、過去二世紀間において、少なくとも本書のある部分はヘブライ語で書かれたものだとする説が、学問的論証をもって提唱されるようになった。この説は、ギリシア文にはいろいろ難解な箇所があるが、これはヘブライ文からの誤訳、もしくは誤読による語句の混同などから生じたものと考えるべきだ、というのである。しかし、このような論証に対しては、そのつど、原語はギリシア語だと主張するもっと有力な論証があげられている。

もちろん、本書にはヘブライ的色彩が強くあらわれていることを認めなければならない。このことときに述べたこととを総合すると、本書は、パレスチナ以外で生まれ、ギリシア語を話し、七十人訳聖書（ヘブライ原文からギリシア文に訳されたもの）を信奉していたひとりのユダヤ人によってしるされたことになる。かれはギリシア語を話す人々の間で育ち、ギリシア語で教育を受けたユダヤ人であるが、その血統、天性、人生観、希望は、強烈なユダヤ的なものである。したがって、本書を文学作品として見るとき、その背景はヘブライ的であり、舞台はギリシア的であるということができよう。

事実、本書に見られる明確なヘブライ的色彩は、ほとんどすべて七十人訳聖書の影響をうけたものである。すなわち、著者は本書をしるすとき、しばしば七十人訳聖書の記事を思いうかべ、特に本書以前の教訓書や預言書の語法、語句、概念を取り、またモーセ五書や他の歴史書からも資料を取っている。著者が七十人訳聖書に頼らずに自分で書きおろした部分では、ヘブライ的色彩はほとんど姿を消している。

様式、文体、構成

本書「知恵の書」はだいたいにおいて、典型的な教訓書（格言の書、伝道の書、シラ書）の部類に属している。この文学的部類（「文学類型」ともいわれている）の書は、道徳生活に関する考察や金言から成っている。この考察や金言は、

人間を窮極の目的、すなわち神と一致する幸福へ導くことを意図したものであり、知恵こそこれを果たすものである。しかしながら、本書が記述されるときには、確固たる計画と順序があったように見える。この点で、他の教訓書がただ知恵について説く金言を集めたにすぎないのと異なっている。しかし、どういう計画であったか、またどういう順序でしるされたかについては、諸説紛々として意見の一致を見ない。

さきに大別した本書の三つの編については、次のように言うことができる。第一編（1—5章）は、著者が読者に対して勧告する様式をとっている。しかし、当時のしきたりにならって、読者を「地を治める者たちよ」（1_1）と呼んでいる。第二編（6—9章）は、ソロモン王を発言者とし、かれが自分と同じ身分の王たちに話しかける様式をとっている。これも当時の文学上のしきたりにならったものである。第三編（10—19章）は、神をしばしば第二人称で呼び、初期イスラエル史の再考察の様式をとっており、劇的にこれを描写している。この第三編のはじまり（10章）は、シラ書の後部（44—50章）の先祖への賛歌に似た点もあるが、文体の点では、類似性より相違性が多いように思われる。

一つの様式もしくは文体から、次のものへの推移が非常にゆるやかで、その境界がはっきりしていない箇所が多い。いちばんはっきり区切られている箇所は、11_1から11_2に移るところであろう。10_1—11_1では前の各章の場合と同様、主役は知恵であるが、11_2からは神となっている（10注15、11注1参照）。また前半（1—9または11_1まで）は、後半（10または11_2—19章まで）よりも、文体に威厳があり、訓戒的、哲学的で、ととのった対句の詩形をそなえた本書以前の教訓書のおもかげを多分にとどめている。これに対して、後半は前半よりも、文体に生気があり、修辞的、劇的、想像的である。また詩の形式も自由である。この点で、後半を散文とみなす人もある。

このような理由、およびその他の理由から、本書は数人の著者によって書かれたとする諸説が提唱されるようになった。しかしこのような諸説は、用語の統一と型にはまった文体が本書全体を通じて見られることを考えると、支持しがたい。

さて、以上に述べた前半と後半の大きな相違点についてばかりでなく、本書中に見られるその他の差異についても満足のいく説を次にかかげよう。

知恵の書はひとりの著者によってしるされたのであるが、各部分が時期を異にして書かれたか、もしくは後半が書かれたあとで前半がつけたされたのである。著者は、11_2から始まって19_{10-22}の結論で終わっている部分を、おそらく壮年のころ、過越の祭りのときの説教、吟唱、あるいは朗読のために、当時のユダヤ教の会堂で用いられていた文体で記述したのである。かれの主旨は、神がどのようにして選民を高め、かれらに光栄を与えたか、すなわち神がかれらを見捨てず、いつでもどこでもかれらのかたわらに立っておられたこと（19[22]参照）を示すことであった。

著者はだいたいにおいて、同胞ユダヤ人だけを対象としていたようである。なぜなら、かれは、エジプト脱出の出来事をじゅうぶんに知っている者だけを対象として書いているからである。たとえば、昔のイスラエル人とエジプト人に関するこみいった七つの比較には、固有名詞が全然しるされておらず、出来事を知らない者にとっては、これらの比較はわかるものではない。しかし会堂でこれを聞いた聴衆あるいは当時の読者は、偶像崇拝の悪に対する著者の痛烈な非難から多くを学びとったことであろう。

次に、著者は、聖書中の歴史だけでなく、特に預言や教訓をも深く考察し、おそらく後年になって、1—9章を書いたのである。今度は、同胞ユダヤ人だけでなく、ユダヤ人以外の高潔な人々をも対象としている。かれの目的は同時代のすべての人々に、神を起源とし人を神へ導く知恵、すなわちはかりし

れない知恵の高さ、深さ、広さ、長さを、一つのまとまった理解しやすいものとして、紹介することであった。

円熟期に達した著者の筆になる1—9章は、かれの壮年のころの著作（11—19章）を、補足するために書かれたともいえるもので、より充実しており、哲学的であり、典型的な教訓書である。まず、著者は、知恵を求め悪を避けよという、読者に対する勧告から始め、また悪について非常にするどい描写をしている（1—2章）。次に、義人と悪人との比較を若干あげて、知恵と悪がそれぞれ現世と来世において何をもたらすかを示している（3—5章）。したがって、はじめの五章に扱われている問題をまとめて言えば、義人の徳の中に見られる知恵ということができよう（1注4前半参照）。

次の四章（6—9章）の主題は、永遠の知恵である。これは、神から発しているように描かれ、また神に内在し、人間に与えられるようにも描かれている。7章においては、著者は知恵の属性を二十一まで列挙したり（7注7参照）、新しい表現を作ったりして（中には新約聖書においてキリストに適用されているものもある。7注8参照）、旧約聖書における思弁神学の頂点をきわめているようである。かれは、8章では、ソロモンの名において、知恵が若い王の花嫁として望ましいことを雄弁に物語り、9章では、ソロモンが若いころに作った知恵を求める祈りを、聞き手の王たちに示しているように述べて、終わっている。

最後に著者は、壮年のころの著作から後年の著作にかける橋として、10_{1}—11_{1}を書いたのであろう。かれは、この部分を記述するにあたって、知恵を授かった者は知恵によって救われるという9_{17-18}の思想を受けつぎ、人祖アダムからモーセと選民までの歴史にあらわれた知恵の働きのあとをたどっている。すなわち、知恵は義人を保護し、知恵を離れ去る者を滅びるままにさせておくということを、順序

よく述べている。10章後部においては、著者は神が行なうべき罰を知恵みずからが行なったようにしし、次に神に対して呼びかけている（10_{19-20}）。これは、主役を知恵から神に替え、また三人称であらわしていた神を、二人称に切り替えるための準備である。

以上述べてきた説は、本書の前半と後半の相違点や類似点の問題を解決するだけでなく、さらに、本書の末尾が突然終わっているように見えることについても、解答を与えることができる。本書の末尾が何か不足しているように見えることから、真の末尾は脱落したのだと考える学者もいる。

本書末部の短い部分（19_{10-22}）がただ後半だけの要約であることは、今日一般に認められているところである。このことは、以上述べてきた説のように、後半が独立したものとしてさきに記述されたとするのであれば、当然のことであろう。また、このような短い結び（19_{6}以下、あるいは19_{22}だけとする者もいる）は、エジプト脱出という歴史上の大きな出来事に関する、過越の祭りのときの説教もしくは「ミドラシュ」（この意味については次に述べる）のしめくくりとして、全くふさわしかったことであろう。

10—19章に見られるミドラシュ

さきに述べたように、本書はだいたいにおいて、教訓書の部類に属する。1—9章はその典型的なものということができる。また、偶像崇拝を論ばくする13—15章の場合も、預言書の文章によく似ているとはいえ（特にエレミヤの書簡といわれるバルク書6章と比べよ）、同じことがいえよう。しかし、10—12章と16—19章は、教訓書ではあるが、「ミドラシュ」（正確には「ミドラシュ・アガダ」）という特殊な文学的部類に属するものである。

ミドラシュは、聖書の部分的説明を行なって人を教化する目的をもった記述形式である、と定義する

ことができよう。「ミドラシュ」という語そのものは、聖書のこの部分はこの時この場において、またこの瞬間この環境において、何を教えているかを「研究吟味すること」を意味する。この形式は幽囚当時およびそれ以後において発展したものである。本書と時代を同じくするクムラン派の文書（最近発見されたもので、もちろん神感書ではない）も、その大部分はこのような性格をもったもので、そのうちの一つに、「モーセ書のミドラシュ」というのがある。

本書の後半に見られる特殊なミドラシュは、「ミドラシュ・ハラカ」や「ペシェル」と区別するために、「ミドラシュ・アガダ」といわれている。（「ハラカ」は「あゆむ」の意、律法尊重主義で、例としては、一コリント9_{9}、一テモテ5_{18}参照。「ペシェル」は「注釈」の意、預言成就に関するもので、例としては、第一どうくつで発見された死海写本の「ハバクク書のペシェル」参照。）「ミドラシュ・アガダ」は聖書中の歴史的記事を扱ったものであるが、人々を教化し励ますために、文字どおりの意味を越え、その中に反映している深遠な神の摂理を説明している。この様式は、バビロン幽囚後、特に祝祭日のとき、会堂における聖書の説教に採用され、非常に民衆に親しまれるようになった。

このような傾向をもった文学的部類にならって、本書の著者は、モーセ五書に詳述されているイスラエル人のエジプト脱出に関する記事を研究し、時代に適応させ、修飾し、これを10—12章と16—19章におさめたのである。もちろんこの部分は、選民に対する神の絶えざる愛と保護、選民の敵に対する神の寛容かつ公正な罰、計画成就のため宇宙の調和を改める神の全能を、劇的に論証することを目的としたものである（16_{24-25} $19_{6\ 13\ 18\ 22}$参照）。

また著者は、この部類の文学にならって、ちゅうちょすることなく、自分の目的に反するものをはぶいたり、（たとえば、うずらを与えられる前の選民のつぶやきと、その後の吐き気——16_{2-3}と民11_{4-}

$_{33-34}$、詩78〔77〕$_{27-31}$とを比べよ）、他の伝承から資料をとって細部を記述したり（10_{20}とその注14参照）、モーセ五書にしるされているある出来事の動機をいくらか変えたり（12_{8}とその注5参照）、出来事の順序を変えたり（16_{18b}とその注5参照）、詩的想像によって細部をしるしたり（17注1参照）、イスラエル人とエジプト人に関するすべてを、最初からの計画どおりに七つの比較の中におさめたりしている（11注3、16注1-4参照）。

なお、著者が資料の「吟味」にあたって、そのよりどころとした原理は次のとおりである。㈠ 人は罪を犯すよすがとしたもので罰されること（11_{16} 12_{23} 16_{1} 17_{2} 18_{4}参照）、㈡ イスラエル人の受けた苦しみは、短く、軽く、薬のような性質をもち、かれらに悔い改めの心をおこさせたが、悔い改めないエジプト人の受けたものは、きびしい処罰であったこと（11_{8-9} 16_{4-12} 18_{20} 19_{1}参照）、㈢ 最後に「これまでに書かれたことがらは、聖書の与える忍耐と慰めによってわたしたちが希望をもつように、すべてわたしたちの教えのために書かれた」（ローマ15_{4}）ことである。

本書の原語をギリシア語とすると、本書のしるされた場所はパレスチナ以外の

場所、時代、著者

所であることは、ほとんど確実であろう。その場所として考えられる最もふさわしい所は、アレキサンドロス大王によって築かれたエジプトにおけるギリシア文化の中心、アレキサンドリアである。ここは、ヘブライ語聖書が翻訳されて七十人訳聖書ができあがった所であり、ここには強力なユダヤ人団体が住んでいた。なお、少なくとも本書後半では選民の敵として特にエジプト人がはっきり描かれていること（前半では$5_{20b-22b}$）、またこの後半には出エジプト記全体に通じる主題が見られること、および著者がエジプトに特有の動物礼拝を極度にきらっていること（特に15_{18-19}参照）を考察するならば、本書記述の地がエジプトのアレキサンドリアであることに、学者の

意見が一致している理由がうなずける。

記述の時代については次のように考えることができよう。本書は七十人訳聖書をひんぱんに用いているので、紀元前二世紀における七十人訳聖書の完成後にしるされたということは確実である。また、著者の精通していたギリシア哲学思想が、キリスト時代のアレキサンドリアにおけるユダヤ系ギリシア哲学者フィロンの思想に先んずるものであることから、時代をしぼって、本書は紀元前二百年間のある時期に書かれたということができる。また、この二百年間のアレキサンドリアにおけるユダヤ人の歴史と、本書にあらわれたユダヤ人の境遇や生活状態との比較研究によって、時代をさらにしぼって、紀元前八八年から三〇年までの間ということができよう。

著者の名は伝えられていない。書名やある部分ではソロモン王のようになっているが、ソロモンが著者でないことは明らかである。聖ヒエロニムスも、かれがヘブライ文から訳した「ソロモンの書」（格言の書、伝道の書、雅歌）の序で、このことを認めている。本書が紀元前一世紀にアレキサンドリアに住んでいたギリシア語を話すユダヤ人によって書かれたことは、ほぼ確実である。敬けんな人としての著者の性格、およびかれが聖書に魂を打ちこみ、これに非常に精通していたこと、ならびに神、先祖、同胞に対して熱烈な愛をもっていたことが、本書にはっきりあらわれている。また、著者が当時のギリシア哲学に関してかなりの知識をもっていたこと、そしてその知識は学術的というよりはむしろ大衆的なものであることも、はっきりあらわれている。しかしながら、かれの名はつかみえない。もちろん、いろいろと提唱されてはいるが、いずれも論証に欠けているので、単なる提唱にとどまっている。

さきに述べたように、1—9章はアレキサンドリアのユダヤ人だけでなく、ユダヤ人以外の高潔な人々をも対象として書かれたものであるが、一つの本として

目的、読者

の本書のおもな目的は、やはり同胞ユダヤ人を慰め、かれらに勇気を与え、特に将来と来世に対する希望を与えることであった、ということができる。当時アレキサンドリアに住んでいたユダヤ人は、異教政府のもとに不道徳な社会の中で、圧迫をうけながら暮らしていた。したがって、一口に言えば、本書の目的は、かれらに真の知恵を教えることであった。

当時のユダヤ人は、ギリシア文化、すなわち唯物主義的異教文化の誘惑にさらされていた。このことから、偶像崇拝を知恵に反する愚の骨頂だとする著者の痛烈な非難がうなずける。また、このような事情から、2章の「悪人」（だれをさすかについては、しばしば論議されてきた）は、元来は一部の背教ユダヤ人をさしたものであることがわかる（2注4後半参照）。かれらは先祖からの伝統を捨て、世間的知恵による快楽主義に走り、また多くの場合、異教政府の要職につき、無信仰な裁判官や役人たちに協力して、同胞ユダヤ人を残酷に圧迫していたことは疑いない。

しかしながら、本書全体を通じて見られる著者の一貫した動機は何であったかといえば、それは、聖書を研究吟味して、その成果を人々にわかち与えることにあったといえよう。実際、著者が本書以前の聖書を熟考せずに書きしるした部分は、ほとんどないくらいである。本書は知恵について、あるいは死後の生命について、あるいはヘブライ史、あるいは神の摂理について説いたものであり、あるいは偶像崇拝や背教ユダヤ人を攻撃した本であるということは事実である。しかしこれらのことがらの一つ一つは、本書全体を通じてはあてはまらない。本書は、エジプトに住んでいた著者が、長年没頭して得たにちがいない聖書研究の成果をもとにして、発展したギリシア文化を背景として、聖霊の導きによって、信仰と道徳に関する時代に適した自己の教説をつくりあげ、これを当時の人々に与えたものである、というべきであろう。

全聖書における本書の地位

本書は、いわば旧約聖書の横断面であるだけでなく、新約聖書の導入口のような働きをしている。すなわち、ヘブライ思想によるユダヤ的道徳律と旧約聖書の教訓とが、最終的に洗練されてギリシア思想による新しい部類に入れられたものであるから、ユダヤ人に託された旧約聖書の教えと、使徒たちによって世界のはてまで伝えられるべき新約聖書の福音とをつなぐ輪の役割を演じている。本書中の表現や比較を最も広く利用したのは、ギリシア語を話す異邦人のための使徒聖パウロ（かれ自身はギリシア語を話すユダヤ人）であったことは、別に驚くにあたらない（3注3 6、4注2、5注5、7注8、9注7、14注12、15注3参照）。

また、聖パウロにならぶもうひとりの新約の大神学者聖ヨハネの著作と、本書との間にも関係が認められる。このほうが前者の場合よりもさらに深い関係があるようである。聖ヨハネは、本書（旧約聖書のうちで最後にしるされたもの）に採用されている形式や型にならって、かれのおもな思想の幾分かを、その福音書（新約聖書のうちで最後にしるされたもの）の中で表現しており、またさらには、主題も若干、その線に沿って選んでいるようである。知恵と神の関係をあらわす本書中の語法と、キリストと御父の関係をあらわす聖パウロの語法とはよく似ているが（特に二コリント4 4、ヘブライ1 3と本書7 26とを比べよ）、それ以上に、神に内在する知恵を擬人化した本書の考えと、永遠のことばである御ひとり子についての聖ヨハネの記述、ならびに神と人の関係についての本書の考えと、人に対する神の愛についての聖ヨハネの記述とは、それぞれよく似ている（特にヨハネ1 3と本書9 1 9……ヨハネ1 14b と本書7 25 8 11……ヨハネ3 16-17と本書9 10 11 26……ヨハネ14 23 16 27と本書7 28とを比べよ）。なお、以上のほかに、聖ヨハネのおもな主題のうちで本書の主題に全く類似したものとして、「永遠の生命と死」、

「光とくらやみ」、「信仰」をあげることができよう。たとえば、信仰は、「不滅の基」、「永遠の生命」であり、神を「見ること」「知ること」である、というふうに述べられていることである（ヨハネ17 3、一ヨハネ5 3-5 11-13と本書2 13 3 4b 7-9 15b 6 18 15 3 16 26とを比べよ）。

特に注目すべき類似点は、本書後半とヨハネ福音書がともに、奇跡の目的と結果を強調していること、および選んだ奇跡の数が同じであり、またその内容が似ていることである。聖ヨハネは、数ある奇跡の中から七つを選び（そのうち五つは共観福音書にはない）、「あなたがたが……信じるために、また、そう信じて、生命を得るためにこれらのことを書きしるした」と述べている（ヨハネ20 30-31参照）。しかし当時のユダヤ人は、多くの奇跡が行なわれたにもかかわらず、信じなかったので、目をくらまされ、神から見捨てられた（ヨハネ12 37 40参照）。本書の著者も、「主よ、あなたに信頼する人々を守るのはみことばであることをあなたの愛する子らが学ぶため」（16 26、なお11 8 12 19参照）という目的をもった七つの奇跡を選んでいる。しかしエジプト人は、前述のユダヤ人と同様、これらの奇跡に注意を払わず、ついに神から見捨てられた（12 26-27とその注10、19 1-4とその注1参照）。次に、両者の七つの奇跡がどのように符合しているかをみよう。

知恵の書　ヨハネ福音書

かわきからの救い

1　岩から水が出る（11^{4-11}）

1　水がぶどう酒になる（2^{1-11}）
〔「最初の奇跡」…2^{11}〕

2　かてとしてうずらが与えられる（16^{2}）
〔「海から」の飛来…19^{12}〕

災いからの救い

3　救いのしるし（16^{5-13}）
〔ヨハネ3^{14-15} 8^{28} 12^{32} 34参照〕

2　カナにおいて（4^{43-54}）
〔「第二の奇跡」…4^{54}〕

3　ベテスダにおいて（5^{1-9a}）

空腹からの救い

4　マナが与えられる（16^{20-26}）
〔ヨハネ6^{26-35}〕参照

4　パン（6^{1-13}）
〔がふやされる
魚（6^{9-11}）

海における救い

5　キリスト、海上を歩く（6^{16-21}）
舟、すぐ陸につく（6^{21}）

くらやみからの救い

5　義人のための光（18^{1-3}）
〔なお18^{4}とヨハネ8^{12}とを比べよ〕

6　めくらがいやされる（9^{1-41}）

死からの救い

6　「ことば」によって災いに勝つ（18^{22}）

7　キリストのことばによるラザロのよみがえり（11^{1-44}）

7　紅海通過（19^{6-9}）

この問題全般については、G. Zeiner, "Weisheitsbuch und Johannesevangelium," *Biblica* 38 (1939) 396—418; 39 (1940) 37—60 参照。

以上、類似点について述べたが、もし聖ヨハネが七つの奇跡を選ぶにあたり、直接にも間接にも本書に依存していないとすれば、本書の源のユダヤ伝承、もしくはそれによく類似したものに依存したと言うことができよう。ともあれ、本書が、旧約の啓示における、新約の啓示の準備としての最後の段階を示していることは明白である。

教　義

本書が他の旧約聖書に卓越している点は、死後の生命（5注1後半参照）についてはっきり教えていることであろう。本書以前の旧約聖書は、この点については、まったくあいまいであるが、本書第一編には、死後の生命の状態と永遠の報いとについての教えがはっきりあらわれている（$2^{23}3^{1-9}$とその注2参照）。この真理に照らして、著者は昔から論議されてきた悪人の栄えと義人の不幸に関する問題に対し、はじめて満足な解決を与えて

いる（3[13]—4[19]、3注10）。

さらに、2[23]—[24]における著者の考えは、後の聖パウロがはっきり述べる原罪についての教説の準備となっている（2注9参照）。

著者の筆になる知恵の描写、特に、神に内在しかつ神から発している知恵の擬人化が、御父に内在しかつ御父から発しているみことばについての教義の形成の準備となったことは、すでに言及したところである。「霊」も「知恵」と同様、ある程度擬人化されている。事実、知恵の二十一の属性（7[22]—[23]）は、知恵に内在する「霊」について述べたものである。「霊」という語は、「知恵」の場合と同様、いろいろな意味に用いられている。この語が直接神や知恵に結びつけられたり、あるいは擬人化されている箇所は1[5]6[7]7[7]7[22]—[23]9[17]12[1]である。これらの箇所における「霊」という語、特に「聖霊」、「主の霊」は、「知恵」が、神の第二のペルソナをさしているように、第三のペルソナをさすものだと解する教父もいる（7注7参照）。

しかしながら、「霊」という語も「知恵」という語も、結局は、決して実在のペルソナを意味するものでないことは明白である。それでは、著者はこれらの語をなんと解していたのであろうか。かれは全世界における神の働きを象徴的にあらわすためにこれらの語を用いたのである、と考えられる。著者が、かれに先だつ教訓書の著者たちにならって（格8章、シラ24章参照）、同じく聖霊の導きによってこれらの語を象徴的に用いたのは、神の働きとその深遠な理由を、最もよく説明できると思ったからであろう。

要約すれば、著者の教えは新しい啓示によるというよりは、むしろ本書以前の聖書に含まれている教義が熟考され、神感によって明解にかつ確実に表現されたものである、と言うことができる。しかしな

がら、著者が神の導きをうけて適切な語や表現を選択したこと、したがってかれの用いた術語が、やがて啓示される新約の偉大な奥義、特に三位一体の奥義の摂理的準備となったことを認めることができる。

典礼における役割

本書が典礼に用いられている度合は非常に大きい。事実、神をたたえ聖人を祝うため、聖務日課書やミサ典書の中において、詩編についでひんぱんに用いられている。ミサ典書中に用いられている本書の章節は次のとおりである。

18[14]—[15]	キリスト降誕祭直後の日曜日の入祭文
11[23]—[26]（[24]—[27]）	灰の水曜日の入祭文
10[20]—[21]	復活祭直後の木曜日の入祭文
1[7]	聖霊降臨の大祝日 その直後の木曜日 聖霊の随意ミサ の入祭文
12[1]	聖霊降臨祭直後の金曜日のアレルヤ唱
16[20]	聖霊降臨後の第十三の日曜日の聖体拝領唱
7[26]	八月六日、キリスト変容の祝日のアレルヤ唱

聖人祝日の典礼の中には、本書3 4 5 7 8 10章から取ったものが多い（3注[2]、4注[1]—[8]参照）。これらの句はそれぞれ、十一月一日の諸聖人の祝日（奉献文）、五月一日の勤労者聖ヨセフの祝日（入祭文）、五月十一日の聖フィリポ、聖小ヤコブの祝日（書簡の部）、三月七日の聖トマス・アクイナス、その他教会博士の祝日（書簡の部または聖体拝領唱）など、二十二の祝日のさいに、となえられる。また、以上の祝日のほかに、七つの「聖人共通ミサ」の場合にもとなえられる。

本書の著者がエジプト脱出の記事を自分の目的に合わせて多少書きかえたように、教会も自己の目的に合わせて、本書の句を多少改作し、現行の典礼に使用している。その例として、キリスト降誕祭直後の日曜日のミサ入祭文となっている18[14—15]の意味と、本書の原意とを比べよ。また、あまり用いられてはいないが、ローマ定式書中の消防ポンプ祝別のための交唱には、本書の句をかなり自由に適用したものが見られる。これはラテン語訳の16[18]19[20(19)]16[26]19[6]から少しずつ取って組み立てたものである。カトリック信者にいちばんよく知られているのは、おそらく聖体降福式における祝福の直前にとなえられる前記の表にあげた16[20]、すなわち "Panem de coelo preastitisti eis, Omne delectamentum in se habentem" 「あなたは天からかれらにパンをお与えになった。それは、楽しみをすべて含んでいる」という句であろう。これは、荒れ野に降ったふしぎなマナを、聖体の秘跡のうちにわれわれに与えられる「天から下るパン」(ヨハネ6[33])にあてはめたものである。

知恵の書は、旧約聖書の第二正典と呼ばれる七つの聖書の一つである。他の六

正典性

書は、トビト書、ユディト書、シラ書、バルク書、マカバイ書上と下で、このほかにエステル書とダニエル書のある部分も第二正典に含まれている。これ以外の旧約聖書は全部第一正典と呼ばれている。これと異なる名称(ホモログメナとアンティレゴメナ)をもってしてではあるが、教父たちが旧約聖書をこの二つの部類に分けていたことは事実である。かれらにとっては、神感についてなんらの疑いも起こったことのない旧約聖書が、われわれの第一正典に属するものであり、神感について議論され、特にユダヤ人たちから聖書と認められなかった聖書が、われわれの第二正典に属するものである。プロテスタントの人々は、ユダヤ人と同じく、第二正典を聖書と認めず、それらを外典(Apocrypha)と呼んでいる。

カトリック側で外典(たとえば、エノク書、マカバイ第三、第四書など)とするものは、プロテスタント側では偽経(Pseudepigrapha)と呼ばれている。

正典成立の歴史は、あまりにも長くかつ複雑であるため、ここに詳しく述べることはできないが、簡単に紹介してみよう。

まず歴史的に見て、はじめはモーセ五書だけがイスラエル人の間において正典と認められていた。そして時の推移とともに、他の書も次々に加えられ、紀元前二世紀の初期にシラ書がしるされる前に、ユダヤ正典は現在の第一正典のすべてを含むようになった。その後の三世紀間における正典についての歴史は、はっきりしていない。すなわち、第二正典の全部もしくは一部が、パレスチナにおいて特にファリサイ人から、はじめは認められていたがあとで除外されたものか、あるいははじめから認められなかったものか、今のところ決定的なことは言えない。この問題は、最近発見された死海写本の研究によって、多少は明らかにされるかもしれない。エジプトでは、第二正典は聖書としてはじめから認められていた。

外典エスドラス第二(四)書ならびにフラビウス・ヨセフスの著にあらわれているように、キリスト降誕とエルサレム滅亡を見た紀元一世紀には、ユダヤ人の間で正典目録について議論がおこった。しかし公式の目録はつくられなかったようである。また使徒側においてもつくられなかったようである。九〇—一〇〇年ごろになって、ユダヤのラビたちはヤムニア(現代のテル・アビブの南方)に会議を開き、ユダヤ正典を偏狭に決定しはじめ、その結果それより三百年前に認められていたものとほとんど同じものにしてしまった。すなわち、神感はエズラ時代で終わったとみなし、原則として、エズラ以後の書、またヘブライ語以外の言語で書かれたものや、パレスチナ以外で書かれたものを、すべて除外した。また、かれらは、キリスト信者の間で特に使用されていた七十人訳聖書を、ヘブライ語聖書からの正確な翻訳でないとして、これを除外し、かれら自身のためのギリシア語訳聖書を作った(例、アクイラ訳、テオドチオン訳、シンマクス訳)。個々の書については、さらに百年以上も引き続き論議されたが、結局は現在の第一正典だけがユダヤ正典となり、新約聖書はもちろん、第二正典のすべては除外されてしまった。

真の正典は啓示に属するものであるから、それは、少なくとも根本的には、最後の使徒が死ぬ前に示されていたにちがいない。事実、使徒たちは、パレスチナのラビたちが定めた偏狭な規準にしたがわず、神感の働きが、エズラ以後の時代、ヘブライ語以外の言語、パレスチナ以外の場所にも及んだことを認めている。アレキサンドリアに住んでいた偏狭的でないユダヤ人も、このように確信していたことであろう（7[27]参照）。第二正典を七十人訳聖書の中に入れたのはかれらであったらしい。

この正典成立の歴史に照らして、ユダヤ人が「知恵の書」を、かれらが独断的に決めた正典の規準、すなわち記述の時代、場所、原語に反するものとして、除外したことは明らかである。また、昔のキリスト信者がユダヤ人と議論するとき、強く本書に訴えたことも、かれらが本書を除外するようになったもう一つの理由として考えられる。しかし、われわれは、使徒たちの教導によって本書が他のすべての聖書と同様、神感書であり、また「教え、戒め、あやまちをただし、義に導くのに有益である」（二テモテ3[16]）こと、および神感をうけた書として教会に託されていることを知っている。

教父たちは使徒時代からだいたい一貫して、本書を聖書として用いている（たとえば、ローマの聖クレメンスは九六―九八年ごろコリント人にあてた書簡の中で、本書2[24]12[10]11[22]12[12]を引用している）。本書は第二正典と呼ばれている他のすべての書とともに、ヒッポ（393）とカルタゴ（397；419）の公会議において、はじめて公式に聖書であると宣言された。また、フィレンツェ（1441）の万国公会議も、「ヤコブ派のための教令」の中で、同じような正典目録を発表した。十六世紀に新たに興ったプロテスタントがユダヤ教にならって、第二正典を除外したため、教会は一五四六年トリエント万国公会議において、われわれが現在信奉している聖書は、第一、第二正典の区別なく、すべて神感によるものであり、旧約聖書も新約聖書もその著者は神であることを、信仰箇条として宣言した。

原　文

本書の原典は失われている。しかし、四、五世紀ごろのアンシャル字体（かい書体）で書かれた四つの有名な写本、すなわちバチカン写本、シナイ写本、アレキサンドリア写本、エフレム再筆写本、ならびに後世の小文字草書体で書かれた多くの写本が今日まで伝わっている。本書の古代語訳本（ラテン語訳・シリア語訳・コプト語訳・アルメニア語訳）のうちでは、紀元二世紀にできた旧ラテン語訳が最も重要である。これはそのままブルガタ訳に編入されている。

本訳は、A・ラルフス氏の批判的研究による SEPTUAGINTA 第四版に基づくものである。本訳がこの版に従わなかった箇所については、付録の原文批判において述べる。

知恵の書

原文批判

次の批判注は、本訳が底本としたA・ラルフスの批判的研究による SEPTUAGINTA（七十人訳）第四版を基礎とする。

略号表

R	ラルフス編のギリシア語原文
㊥	ギリシア語写本一般
㊥B	バチカン写本
㊥S	シナイ写本
㊥A	アレキサンドリア写本
㊥C	エフラエム再筆写本
㊥写	数種の草書体写本
㊥訳	古代語訳本（ラテン語訳、ペシッタ訳、アルメニア語訳など）
★	第一の筆によるもの

2 9 【野べ】 ラテン語訳の8節b、およびパリ国立図書館コイスリン集 三九四号 写本の用語表参照。Rでは「われわれのうち」と読まれ、本句の意味は異なっている。2注3参照。

2 23 【本性】 ㊥B ㊥S ㊥Aによる。Rでは「永遠性」。

5 14 【しぶき】 ㊥写 ㊥訳による。Rでは「霜」。

12 5 〃 【殺し〔直訳では殺害者〕】 ㊥による。Rでは「（子どもに対する無慈悲な）殺害」。

〃 【（人肉のうたげを開いてはらわたを）食い〔直訳では食う者〕】 ㊥写 ㊥訳による。Rでは「（はらわたを）食う（人肉のうたげ）」。

〃 【血なまぐさい】 ㊥Sによる。Rでは前句に含まれ、「（人肉）と血（のうたげ）」となっている。

13 13 【怠慢な（熱心さでそれを）】 ㊥B ㊥S★㊥Aによる。Rでは「（それを手にして）技能（をつくして）」。

16 12 【すべてを】 ㊥B ㊥Sによる。㊥A ㊥Cでは「すべての者を」。

17 10 【生まれつき（おく病であることを）証明する】 ㊥Bによる。「生まれつき」は㊥S★㊥Aなどにもある。Rでは「（悪は）自分の証言によって、（おく病者だと宣告される時）」。

18 1 【かつてのかれらの苦しみがいかなるものであったにせよ】 ㊥B ㊥Sなど、およびギリシア文字の別の組み合わせ方による。Rでは「苦しまなかったので」。18注1参照。

18 22 【災い】 ㊥による。Rでは「怒り」。

Imprimi potest. Romae, die 2 Junii 1960
Fr. Aug. Sépinski, Min. Gen. O. F. M.
Imprimatur. Tokyo, die 8 Junii 1960
+ Petrus Cardinalis Tatsuo Doi
Archiepiscopus Tokiensis

一九五八年七月一日 初版発行
一九九二年九月二十日 初版九刷
☆定価は表紙に表示してあります。
訳注者 フランシスコ会聖書研究所
印刷所 ㈱平河工業社
東京都新宿区四谷一ノ二
発行所 160 中央出版社
電話〇三(三三五七)六四〇一(代)
版元〇三(三三五九)〇四五一
FAX〇三(三三五一)九五二四
振替 東京 二—六一二三三番

版権所有

Studium Biblicum Franciscanum
4-16-1. Seta
Setagaya-ku, Tokyo
158 Japan

Publisher

Chuo Shuppansha
1-2, Yotsuya
Shinjuku-ku, Tokyo
160 Japan

Printed in Japan

ISBN4-8056-5802-9 C3016

《既　刊》（上・並製）

創　世　記
出エジプト記
レ　ビ　記
民　数　記
申　命　記
ヨシュア記
サムエル記上・下
エズラ記、ネヘミヤ記
トビト書、ユディト書、エステル書
マカバイ記上・下
ヨ　ブ　記
詩　　編
格言の書
コヘレト（伝道の書）、雅歌
知恵の書
シラ書（集会の書）
ダニエル書
ホセア書
ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、
ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書
ゼファニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書、哀歌、バルク書、エレミヤの手紙

新約聖書（合本）
B6判上製（赤・黒）
A6判上製（赤・黒・青）
A5判上製（黒）

マタイによる福音書
マルコによる福音書（改訂版）
ルカによる福音書
ヨハネによる福音書（改訂新版）
使徒行録
パウロ書簡Ⅰ（ローマ、ガラテヤ）
パウロ書簡Ⅱ（一・二コリント）
パウロ書簡Ⅲ（エフェソ、フィリピ、コロサイ、一・二テサロニケ、フィレモン）
パウロ書簡Ⅳ（一・二テモテ、テトス）、ヘブライ人への手紙
全キリスト者への手紙（ヤコブ、一・二ペトロ、一・二・三ヨハネ、ユダ）
ヨハネの黙示録

《次期予定》（上・並製）

士師記、ルツ記